

テレビドキュメンタリーは震災をどう伝えてきたか

原 由美子*

東日本大震災関連番組の保存

NHK放送文化研究所では、JCC株式会社の番組録画システム「Max Channel Digital」を利用して、震災発生時から現在までの東日本大震災関連テレビ報道番組を収集・保存している。

収集にあたっては、「Max Channel Digital」で生成されるメタデータを利用し、メタデータに「震災」あるいは「地震」「復興」「原発」「放射能」「エネルギー」というキーワードのいずれかが含まれる番組をすべて保存するという方法をとっている。

ニュース、報道・情報番組からバラエティーまで、どんな番組でもそのメタデータに上記キーワードが入っていれば保存している。今回、それらの収集番組の中から、下記の条件に当てはまるものを分析対象とし、その傾向を分析した。

- 2011年4月1日～2014年3月31日までに放送された東日本大震災関連のドキュメンタリー番組（定時のニュース報道番組、討論番組、原則として生放送番組は除く）
- 番組全体で、東日本大震災に関するテーマを取り上げたもの（番組の一部に含むものは除く）
- 全国ネットで放送されたもの（東京キー局で放送されたもの）
- 初回放送の番組のみとし、再放送は含めない

これらの条件で集計した番組は全体で597番組、NHKが347、民放が250であった。各局の内訳は表1のとおり。

番組枠ごとにリスト化したものが表2である。NHKではNHKスペシャル、「明日へ—支えあおう—」（毎週日曜日午前に放送）などで多く放送されているほか、特集など定時枠でない番組も多い。EテレのETV特集でも関連番組が42本あった。民放の場合は、東日本大震災の関連で特別に編成された番組のほか、「NNNドキュメント」や「テレメンタリー」などのドキュメンタリー定時番組での放送が多い。

関連番組3年間の傾向

番組数の推移をみると図1のように、毎年3月、震災の節目のタイミングで番組数が突出して多くなっている。このほか防災の日のある9月や、年末時期にも若干の山がある。番組本数を3か月ごとに集計すると（表3）、NHKの場合、最初の1年間は、30本台前後で推移、その次の年は20本程度に若干減少した。一方、民放も最初の1年間は30本前後だったが、2012年になると10本台に減少、2013年には一桁台と徐々に減少している。

次にキーワードごとに言及された番組の推移を見た（図2）。全体の推移と似たような山を示し

表1 震災関連ドキュメンタリー番組数
(2011年4月1日～2014年3月31日)

全体	597 (本)
NHK	347
民放	250
(日本テレビ)	61
(テレビ朝日)	71
(TBS)	50
(テレビ東京)	24
(フジテレビ)	44

表2 分析対象ドキュメンタリー番組 (2011年4月1日～2014年3月31日)

NHK総合	NHKスペシャル	89
	目撃! 日本列島	29
	明日へ 支えあおう	86
	ヒューマンドキュメンタリー	4
	明日へ (被災地) 再起への記録	15
	特集など	82
NHKEテレ	ETV特集	42
日本テレビ	特別番組	8
	NNNドキュメント	53
テレビ朝日	特別番組	12
	報道発ドキュメンタリー宣言	11
	テレメンタリー	48
TBS	特別番組	27
	JNNルポルタージュ 報道の魂	23
テレビ東京	特別番組	13
	日経スペシャル ガイアの夜明け	11
フジテレビ	特別番組	16
	FNSドキュメンタリー大賞	16
	NONFIX	2
	ザ・ノンフィクション	10

ており、やはり節目の時期が突出して多い。番組数が多いのは「震災」と「原発」で、その2つがいずれの時期も上位を占めている。

「エネルギー」というキーワードに着目すると、最初の時期こそ夏に山があるが、2012年以降は言及されなくなっている。

3月などの節目の月とそれ以外で集計してみた(図3)。全体で見ると、2割強が毎年3月に放送されている。NHK 17%程度、民放 23%で、民放の場合は約4分の1が3月に放送されているということになる。また、9月や12月を含めると、民放の番組の半数近くがそうした節目のタイミングでの放送である。

放送時間帯でみると、NHKの場合は、午前中と19時から夜中までの夜間の視聴時間帯の放送が多いが、民放では、深夜0時から朝の5時までの時間帯に多い。これはドキュメンタリー番組の放送枠がこの時間帯にあるため、民放の場合は関連番組の半数以上が深夜に放送されている。

表3 関連ドキュメンタリー番組本数の推移（3か月ごと）

	全体	NHK	民放
2011年3-6月	64	33	31
2011年7-9月	76	37	39
2011年10-12月	54	26	28
2012年1-3月	69	36	33
2012年4-6月	40	30	10
2012年7-9月	40	26	14
2012年10-12月	31	21	10
2013年1-3月	53	24	29
2013年4-6月	35	28	7
2013年7-9月	31	23	8
2013年10-12月	44	27	17
2014年1-3月	60	36	24
全期間	597	347	250

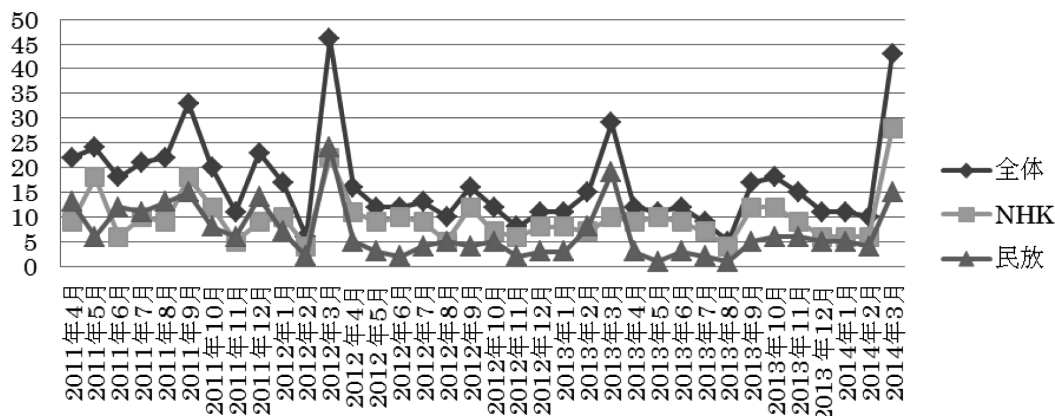


図1 震災関連ドキュメンタリー番組数の推移（月ごと）

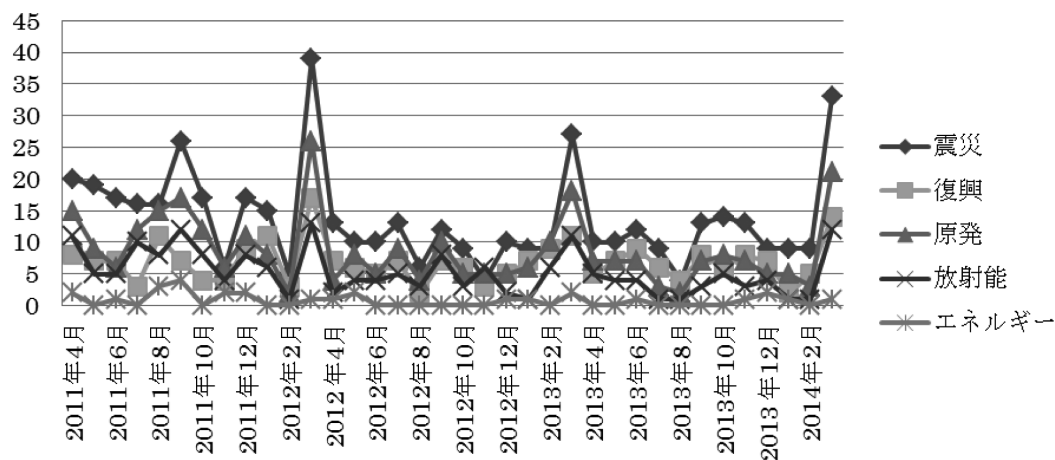


図2 キーワード言及番組の推移

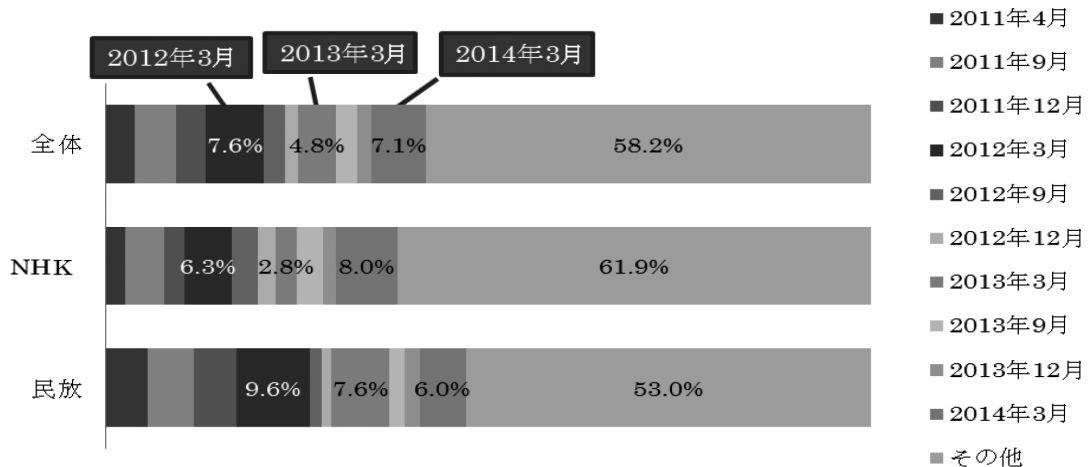


図3 節目の月の放送

これらの番組がどのくらい見られたのか、その視聴率（ビデオリサーチ世帯視聴率、関東地区）を調べてみた。最も高かったのは、2011年5月7日に放送されたNHKの「NHKスペシャル 巨大津波“いのち”をどう守るのか」で、19.5%であった。番組枠ごとの平均視聴率をみると、「NHKスペシャル」（NHK）6.7%。「ガイアの夜明け」（テレビ東京）5.4%だが、その他は放送時間帯の影響もあって、おしなべて低い視聴率となっている。視聴率の推移をみると（図4）、最初の1年間ぐらいは4%台で推移していたが、現在は3%程度となっており、もともと高くはないが、さらに低下傾向にあることがわかる。

被災者・被災地を取り上げた番組

東日本大震災関連の番組と言っても、地震、津波、原発事故などテーマは多岐にわたる。そこで、番組が何を主たるテーマにしているかで分類し、そのなかで被災者・被災地を主テーマにした番組に絞って分析することにした。

図5は5つのテーマ別に分類した際の構成比である。597番組のうちの9割近くが被災者・被災地を主たるテーマにしていた。推移をみても、ほぼどの時期においても被災者・被災地を主テーマにした番組が9割近くを占めていた。エネルギー問題を主テーマとした番組は、2011年の夏には5%台を占めていたが、最近では全く放送されなくなっている。被災者・被災地を主テーマにした番組は597番組のうちの500番組で、NHK 286、民放 214番組だった。枠別には表4のとおりで、全体の傾向とほぼ同じような番組枠が挙がっている。

テーマ分類別の視聴率をみると、被災者・被災地を扱った番組というのは必ずしも視聴率が高くない。地震、津波を扱った番組が全体に比べると若干視聴率が高いようである。

被災者・被災地を主テーマにした番組についてメタデータから市町村を抽出し、テキストマイニングツールを用いてカウントした。全体としては、宮城県石巻市が最も多く取り上げられており、次いで気仙沼市、陸前高田市、釜石市、南相馬市という順であった。これと被災者数（死者・行方不明者数）との相関をみたところ0.8以上の高い相関があった。つまり、死者・行方不明者数の多い市町村ほど取材地としても取り上げられていたということである。ただし、宮城県亘理町、宮城県岩沼市、福島県新地町など、被害が大きかったにもかかわらずほとんど言及されていない地域も

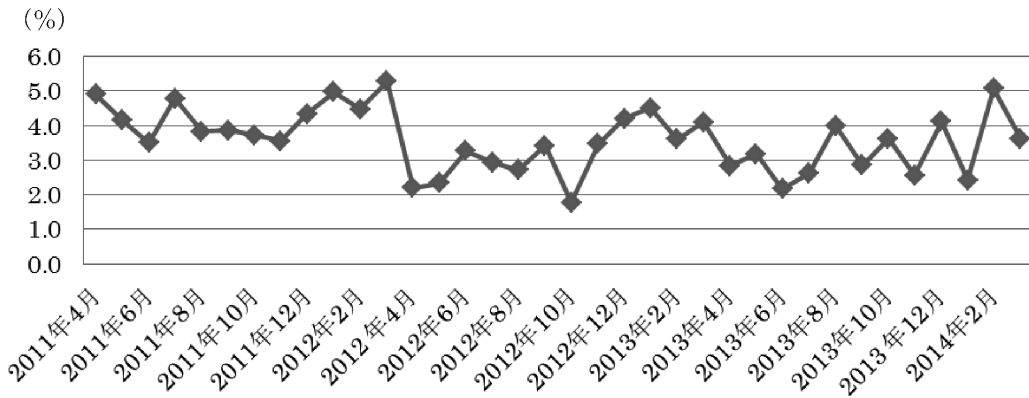


図4 平均視聴率の推移

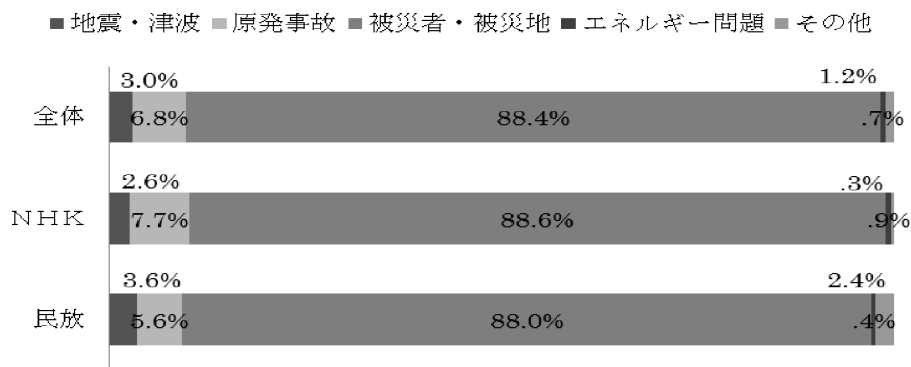


図5 番組テーマ分類比率

表4 テーマ分類「被災者・被災地」番組の数

放送局	番組枠	番組数
NHK	NHKスペシャル	53
	ヒューマンドキュメンタリー	4
	明日へー支え合おうー	84
	目撃！ 日本列島	28
	明日へ 再起への記録	14
	特集番組	73
	ETV特集	30
日本テレビ	特集番組	6
	NNNドキュメント	47
テレビ朝日	特集番組	12
	報道発ドキュメンタリー宣言	10
	テレメンタリー	42
TBS	特集番組	17
	報道の魂	21
テレビ東京	特集番組	11
	ガイアの夜明け	13
フジテレビ	特集番組	13
	FNNドキュメンタリー大賞	14
	NONFIX	1
	ザ・ノンフィクション	9

あった。

キーワード別にみると、「震災」と「復興」の場合は、石巻市、気仙沼市など全体傾向と同じような順位だったが、「原発」「放射能」というキーワードでみると、南相馬市が最も多く、いわき市、浪江町など福島県の市町村が上位に来る。取り上げられた内容についても、タイトルやメタデータから分析してみたところ、「震災」「被災地」などの語彙のほか、「家族」「故郷」「命」「ふるさと」「町」「海」といった言葉が比較的頻出していた。

メタデータをテキストマイニングすると、メタデータの性格を反映して「コメント」「映像」といった言葉が多くなっていたほか、やはり「大震災」「東日本」「津波」、あるいは地名が上位に来る。

図6は「避難」という語彙がメタデータに含まれていた番組の件数の推移である。いずれの年も3月の時期が突出しているが、2014年の3月がこれまでで最も多くなった。これは原発事故の影響による放射能汚染からの避難に関する問題が現在も続いており、解決していないということのあらわれであろう。「復興」や「支援」を含む番組の件数をみると、ここでも節目のときに頻出している。

事例研究：石巻市と南相馬市が主舞台の番組

震災復興関連で最も言及が多かった石巻市を主舞台にする番組と原発放射能関連で最も言及が多かった南相馬市を主舞台にする番組について、どういうテーマがどのように扱われているか、より詳しく検証した。

石巻市を主舞台とした番組は、NHKと民放で若干傾向が違っており、NHKの番組の場合は「仮設住宅」「高齢者」「独り暮らし」「ボランティア」「失業」「医療」など比較的多岐にわたる問題が取り上げられていたが、民放の番組では家族を失った遺族の暮らし、その後の生活ぶりを追った番組が目立った。また、同じ題材を取り上げた番組が幾つか散見された。例えばシャンソン歌手のクミコが、震災当日に石巻市で公演予定があり被災したということから、その後の活動を追った番組が異なる局で3本あった。

番組内容の推移をみると、石巻市の番組では、2年目からは「検証」「教訓」などの語があらわれ始め、3年目になると「復興」「再生」も描かれ始めていた。

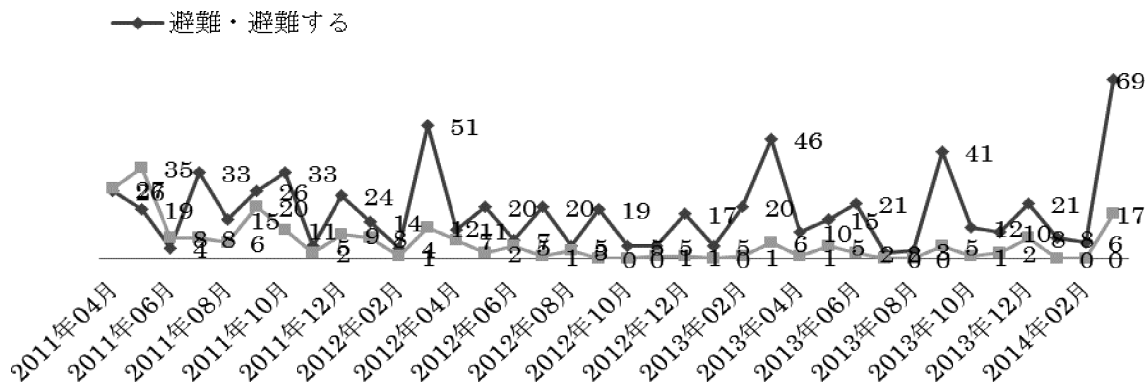


図6 「避難」に関する言及

一方、南相馬市を主舞台にした番組では、原発事故による放射能汚染からの避難と除染のテーマが、3年間を通じてどの局でも共通して取り上げられていた。そのなかで相馬野馬追を扱った番組が3本あり、そのうち2本がNHKの番組だった。また、同じ人物（自らがんに冒されながらも震災直後から診療を続けた産婦人科医師）を取り上げた番組が、同じ時期に民放の異なる局で2本あった。避難と除染がテーマの中心ではあるが、2012年の後半ぐらいからは減少傾向にある。

石巻市と南相馬市を舞台にした番組を見直すなかで、「前に進む」という表現の出現の仕方が違うと感じ、比べてみた。そもそも「前に進む」という言葉が出てくる頻度が石巻市と南相馬市で異なる（石巻市29番組中12番組で約4割に対し、南相馬市23番組中7番組で約3割）。さらに、石巻市の場合は、既に2011年の7月の番組で登場人物自身が「前に踏み出そうと思って、今日からは泣かない。がんばります」と発言している。これに対し、南相馬の場合は、コメントのなかで「前に進まなければなりません」とか「前に進むのが困難です」といった表現がされることはあっても、登場人物自身の発言としては出てこない。2013年6月の番組に至ってようやく登場人物自身が「前向いていかないとどうしようもない」というような発言をしている。困難はありながらも少しずつ前に進めている石巻と、まだそのスタート地点にさえ立てない状況の南相馬、という現実が端的に見える結果ではないだろうか。

このほか、登場人物の人数をNHKと民放で比較したところ、NHKの番組のほうで登場人物が若干多かった。民放の場合は1人の人物や1つの家族を密着して追う番組が多いためだと思われる。

分析手法：メタデータとテキストマイニングについて

なお、分析の手法について、気がついたことを述べておきたい。

今回はドキュメンタリー番組に限定したが、それでも全体で600本近く、被災者・被災地を主テーマにしたものに限っても500本にのぼったため、全部の番組をすべて視聴して分析することはできなかった。番組全体を複数回視聴したのは、石巻市と南相馬市の番組に限られたが、それでも膨大な時間と手間がかかった。

そのため、今回の分析では、メタデータのテキストマイニングを行うことで内容の傾向を把握することを試みた。しかし、取材地や出演者の記載など、メタデータがどのようなルール、原則で作成されているのかは不明である。メタデータ作成の意図・目的と研究者が記録、カウントしたいと思う対象とにずれもある。そのため、研究目的にかなったデータとして正確を期すには、もう一度研究者自身がチェックすることも必要になってくる。

また、テキストマイニング・ツール（今回用いたのは、野村総研のTrue Teller Ver.8.0）についても、使い勝手の悪い面があった。たとえば分析結果データは、時系列ではなく出現頻度順や50音順で表示される。すると「オープニング」と「エンディング」だと「エンディング」のほうが「オープニング」より先に表示される、というようなことも起こる。

今後、こうした分析用データやツールを活用するための方法論について、同様の作業に当たられた研究者の方々と意見や情報を共有・交換し、方法論の改善を進めていきたいと思っている。

今後に向けて

今回はドキュメンタリー番組に限定したため、ニュース番組など、ほかのジャンルの番組で扱われた東日本大震災関連の報道については、対象とすることができなかった。これらの手つかずの領域の番組についても、検証を拡大していく必要があるだろう。

番組数が減少し、視聴率も低下傾向とはいえ、まだまだ震災関連の番組は続くと思われる。今回の分析は3年分だったが、少なくとも5年間ぐらいはこの作業を続けたいと考えている。

さらに、今回は事例研究として、石巻市と南相馬市を取り上げたが、事例をどうとるか、地域で限定するだけでなく、避難や除染といったテーマ、あるいは取材対象とされた人の立場など、さまざまな焦点の絞り方が考えられる。

詳細な内容の分析についても、今回は、テーマや登場人物などの要素にとどまった。使われた映像や語られた言葉、視点の置き方など検証すべき課題はまだ多く残されている。これらについて、部外の研究者の方々と協力、分担する方向も検討したいと思っている。是非、御協力をお願いしたい。

なお、今回報告した内容の詳細については、『NHK放送文化研究所年報 2015 第59集』掲載の論文を参照されたい。